

# 代名詞 je, tu の使用について

西 村 淳 子

0. 序論
1. 代名詞 je, tu に関するパンヴニストの見解
2. 記号の価値の特徴
  - 2.1. 指示機能の表示
  - 2.2. 単数表示
  - 2.3. デイクシスの性格
  - 2.4. 人称性
3. je, tu の機能の特徴
  - 3.1. je, tu の指示は普通常に成立する
  - 3.2. je, tu は指示物の恒常的で顕在的な性質を明示しない
4. 話し手から見た je, tu の使用
5. むすび

## 0. 序 論

代名詞 je, tu が、ソーシャル言語学でいう「ラング」に属する「記号」とは異なり、言語活動の行使としての各々の言語行為<sup>1)</sup>から相対的にも独立して考えることのできないものであることは、パンヴニストがその論文「代名詞の性質」<sup>2)</sup>によつて的確に指摘したところである。このような記号<sup>3)</sup>の存在は、言語現象におけるたんなる例外的事象として我々の興味を惹くわけではない。この事が言語学的に重大な意味を持つのは、言語を情報内容という意味の側面、あるいは繰り返し使用しうる潜在的記号の体系「ラング」という側面から考察するだけでは説明し尽すことのできない、言語使用の行為に関する広範な

問題領域の存在を示しているからである。周知の通り、この問題領域は、フランス言語学においては、バンヴニストの上記の代名詞論のほか、ギュスターヴ・ギョームの冠詞論、動詞時制論などによってその研究に先鞭がつけられたが、これとは別に、ヴィットゲンシュタインの「言語ゲーム」の考察、オースチン、ストローソン、サールなどによる「スピーチ・アクト」の研究、またモリスの語用論などにおいて、哲学的研究の対象にもなっている。様々な角度から、それぞれ異った個別問題について成されたこれらの研究を、各々の立場、研究対象の連関を解明しながら、je, tu という代名詞の考察において総合することは、現在の時点では不可能ではあるが、特定の研究に内在する観点を明らかにし、観察された事象をより広い視野から立体的に位置づけるために、これら様々な研究は有力な手掛りになるであろう。

本稿では、したがって、バンヴニストが上記の論文において行った代名詞 je, tu の分析を基礎に、これらの代名詞の特殊性が言語行為のどのような構造に基づくのかを、記号の価値、ディスクールにおける記号の機能、話し手の行為という三つの観点から詳しく検討してみることにする。

## 1. 代名詞 je, tu に関するバンヴニストの見解

「代名詞の性質」のなかで、バンヴニストは代名詞 je, tu をことに名詞的記号と比較し、その特殊性を「指示構造」の問題として分析している。また三人称の il はふつう「人称代名詞」として je, tu と同じ文法的カテゴリーに分類されているが、je, tu とは異った性質のものであることを主張する。ここでは、三人称の問題はいったん保留し、代名詞 je, tu に焦点を当ててバンヴニストの見解を要約する。

名詞は、様々な使用されても常に表象において恒常的かつ「対象的」な概念を指示するが、je や tu は使用されるたびに独自の指示をおこなう。je あるい

は **tu** として定義されうる「対象」などは存在しないからである。**je, tu** が指示するのは「対象的」な現実ではなく、(いわば主体的な)「ディスクールの現実」である。したがって **je** や **tu** は「**je** という言語的実例 instance を含んだ現在のディスクールの実例を発話する個人」, 「**tu** という言語的実例を含んだ現在のディスクールの実例を受ける個人」というふうに、言語行為によってしか定義されない。ところが、「ディスクールの実例」とは元来一回限りのものであり、それぞれの **je, tu** は、この一回においてのみ有効である。

また、このような「ディスクールの実例」に対する指示は、デイクシスと呼ばれる機能をもつ一連の語、*ici, maintenant* などの定義特徴でもあり、これらの語はみなディスクールの一回性に基づき、使用のたびに単一かつ特定の指示を行う。

**je, tu** は、現実、ないし「対象的」位置を示さず、自らの使用の場に再帰するので、現実について何も断言せず、真偽を問われることも誤用されることもありえない。このような **je, tu** の機能の重要性は、間主観的コミュニケーションのなかで、一人一人の話し手がみな別々の符号を用いずとも、**je** という一つの記号によって、言語行為の主体として自らを措定し、自らの言語行為を担うための手段となる点にある。

したがって **je** は、潜在的な形では存在しえず、常に言語行為のなかで顕在的に存在し、話し手が自分の言語行為を自ら担う過程を示すのである。

以上の指摘は、言語使用の一つの条件としてのラングには還元しきれない現象、したがってまたこのラングの項としてのソーシャルの記号概念(潜在的に意味的価値をもつ記号)では説明できない「記号」の存在を、言語使用に固有の現象としての確にとらえている。しかしながらさらに溯って現象の根拠を問う段階においては、そこで示されている諸問題が、明確な理論的位置を与えら

れずに残されているように思える。そこで、以下、バンヴニストが指摘した上のような現象が何に基づくのかを、記号の価値、記号の機能、話し手の行為という三つの観点から、もう一度検討してみたいと思う。

## 2. 記号の価値の特徴

バンヴニストの考察に基づいて、je, tu という代名詞を、名詞的記号と比較してみると、次の四つの特徴を取り出すことができるように思う。

1. je, tu は指示機能の表示を具えている。(指示機能の表示)
2. je, tu は、単数という数の表示を具えている。(単数表示)
3. je, tu は、現在これらの記号が使用されているという事を介して指示をおこなう。(デイクシスの性格)
4. je, tu の指示物(話し手、聴き手)は、言語行為を介して指示を受ける。(人称性)

### 2. 1. 指示機能の表示

#### 2. 1. 1. 指示 (référence)

je や tu の指示機能の表示を問題にする前に、「指示」という語で何を意味しているかを断っておく必要がある。ただ「指示」という語が、言語活動のどのような現象について用いられるべきかという問題は、それ自身大きな問題であり、ここで正面からこの問題を論じることとはできない。そこで、ここでは、もっとも一般的に「指示」と呼ばれている典型的な現象に限定してこの語を用いることにする。

それは、話し手が言語によって、特定化された現実を指定 (désigner) する場合に、話し手の行為のあらわれとしての言語手段が果す役割のことを言う場



合である。

ある風景の写真を見て成されたディスクールの中なかから例を挙げると、

- 1) Donc, *au premier plan*, on voit des arbres en fleurs, et qui se détachent sur *le paysage*, sur un paysage de montagne et sur un . . .  
Derrière *les arbres* on voit un village avec . . .

この文の中なかで、特定の場を指定するために用いられた *au premier plan*, 特定の風景, 特定の木を指定するために用いられた *le paysage*, *les arbres* は指示機能を果していると考えられる。定冠詞はかならずしもここで言う指示機能のみを表示するわけではないが、名詞表現が指示機能を果しうる可能性をもっていることを示している。

指示機能を果しうるのは、もちろん名詞だけではなく、このほかおもに、

#### 代名詞

- 2) *elles* (montagnes) sont couvertes de neige
- 3) *ce* sont des montagnes qui ont l'air de porter très peu de végétation

#### 固有名詞

- 4) Une forme d'architecture très particulière, qui se retrouve surtout dans *le Midi de la France*.
- 5) c'est *le Canigou*

#### 副詞

- 6) Et *devant*, ce sont des montagnes vallonnées, des montagnes à vaches.

などがこの機能を果す。

この場合大切なのは、第一に、「指示」とは言語行為が実際に行われたときに言語手段の果す役割であり、ある言語手段が指示機能を果すか否か、どのような指示をおこなうか、すなわち何を指示するかは、実際に言語行為が行われ、指示対象が認知されているディスクールの場においてしか決まらないとい

うこと、第二には、「特定化された現実」というのは、現実を見る主体を離れて現実内に在する事柄ではなく、現実を如何に捉えるかという主体の態度によって決る事柄であるということである。

## 2. 1.2. 記号の意味的価値

このような性質をもつ「指示」機能との関係で、記号の意味的価値に注目すると、この二つの現象が、言語活動において、非常に異ったあり方をしていることがわかる。

まず、記号の意味は、特定の言語行為の場から相対的に独立して定義されうる<sup>4)</sup>。つまり、様々な言語行為の場を通じて、ある程度恒常的なものである。たとえば、あるディスクールのなかで *arbre* と呼ばれた特定の現実とは、他の多くのディスクールにおいて *arbre* と呼ばれた様々な特定の現実と何らかの共通点をもっている。この共通点、すなわち、同一の記号を適用することのできる様々な特定の現実の間に見出せる共通の性質に対応するのが記号の意味的価値であり、これは、他の記号を用いて、定義という形である程度まで取り出すことができる。記号の意味的価値の恒常性は、確かに、記号によっても様々であるし、意味を取り出す際に行う定義の厳密さによっても異なる。しかしながら、記号の意味の恒常性を完全に否定するとすれば、話し手は、たとえば *arbre* という記号がどの現実に対応するかをディスクールを行うたびに勝手に決めることができ、したがって、どんな物をも *arbre* と呼べることになる。そして、そのかわり、ある物が *arbre* であると言ったところで、その物が *arbre* という記号に対応していること以外、語られている現実について何も明らかにしたことにはならないことになる。ところが、実際には、*arbre* と呼べる現実と呼べない現実がある。したがって、誰かがある現実を *arbre* と呼んだなら、そのことによつて我々は、その現実が他に *arbre* と呼ばれる多くの物と何ら

かの共通点をもつと判断されていると解する。なぜなら、我々は、arbre という記号が、一定の現実のあり方に対応する意味的価値をもっており、記号の意味的価値が、現実を見る主体の観点に還元し尽されないことを知っているからである。ある現実を特定の「人」と見るか、「人間」というカテゴリーの不特定のメンバーとみるかは、見られている現実に内在する性質ではなく、主体がこれをいかに捉えるかという事柄であるが、ある現実が arbre であるか homme であるかということは対象自身の性質にかかわることである。

したがって、記号の意味的価値は、次の二つの点において、記号の指示機能とは異った現象であると言える。

1. 記号の指示機能が、各ディスクールの場でしか決まらない事柄であるのに対し、記号の意味的価値は、各ディスクールの場からは相対的に独立して決まる。すなわち、ラングのレベルで記号が具えている価値である。
2. 指示機能が、現実を見る主体の態度によって定義されるのに対し、意味的価値は、主体の態度には還元し切れない現実のあり方に対応している。

### 2. 1.3. バンヴニストにおける「指示」

ここでバンヴニストの論を振り返ってみると、この論のなかで、「指示」ないしこれに関連する「指示する」、「指示物」、「指示機能を果すもの」などの語が、ある時は、記号が機能してはじめて生じる記号と特定の現実との関係について用いられ、ある時は、記号と記号が使用される以前から持っている意味的価値との関係を表わすために用いられていることがわかる。例を挙げると、

「各々の je は、それぞれ独自の指示をおこない、そのつど je として措定される唯一の存在に対応する」<sup>5)</sup>

この場合「指示」は、記号と特定の現実との関係について用いられている

が、

「語彙概念を指示する名詞」<sup>6)</sup>

「名詞の使用のおおのの実例は、恒常的で『対象的』な一つ概念を指示し」<sup>7)</sup>

という二つの文脈においては、記号とその意味的価値との関係を述べるのに用いられている。

繰り返すまでもなく、記号と特定の現実との関係は、ディスクールの中かで記号が使用されてはじめて生じる関係であり、記号と概念との関係は、各々の言語行為が行われる以前の段階、すなわちラングのレベルに属する、いわば記号の内部構造である。「指示」という語でどのような現象を語るのかは、この際本質的な問題ではないにしても、この二つのレベルの現象を同一の用語で表わすことは、ラングに属する現象と、ディスクールに固有の現象を同一視することになる。しかも、バンヴェスト自身が、この論の目差すところを、「言語記号の指示構造」における *je, tu* の特殊性の解明と位置付けている点からみても、この同一視をたんなる用語上の偶然と解することはできない<sup>8)</sup>。したがって、本来、この論においてバンヴェストが、ラングのレベルから区別されたディスクール固有の現象の解明を目的としたにもかかわらず、この二つのレベルの区別を徹底し切れなかったことが、この「指示」という語の用法に表れていると考えられる。

#### 2. 1.4. 代名詞 *je, tu* の指示機能の表示

たとえば *arbre* のような名詞は、上で見たように意味的価値の同一性を原則としているが、その意味的価値の各言語行為のなかでの使用法、つまりディスクールにおける機能は多様である。

7) *L'arbre de Noël* que préparait ma tante Plantier réunissait chaque

- année un grand nombre d'enfants, de parents et d'amis.<sup>9)</sup>
- 8) L'arbre produit de beaux fruits dès qu'il est *en espalier*, c'est-à-dire dès qu'il n'est plus un arbre.<sup>10)</sup>
- 9) L'arbre désigne un végétal ou sa représentation<sup>11)</sup>.

例文 7 の *L'arbre* は特定の個物を指示する。

例文 8 の *L'arbre* は一般概念を表わし, *un arbre* は *arbre* というカテゴリーの不特定のメンバーを表わす。

例文 9 の場合は, ラングの項としての特定の記号を示す。

これらの名詞に先行する冠詞は, けっして単純にそれぞれの機能に一对一対応するわけではないが, 名詞の機能の範囲を示していると考えられる。

これに対して, *je* や *tu* の場合は, 話し手, あるいは聴き手の指示という指示機能の同一性を原則として用いられる。だからと言って実際に *je* や *tu* が話し手, 聴き手の指示以外に用いられないわけではないが, 別の用法をするときには状況や文脈によって本来の指示機能が実現しないことを示す必要がある<sup>12)</sup>。

また, *je* や *tu* が, 冠詞や形容詞などの限定辞を伴わないことも, 名詞の場合とは異なり, 他の記号によって機能を示される必要がないと判断できる根拠である。

## 2. 2. 単数の表示

*je* や *tu* は, *arbre* などの名詞がもっていない数に関する表示を具えている。*je, tu* は, 各々の使用において, 一人の人, すなわち一個の個物のみを指示する。*arbre* などの名詞が, 単数にも複数にも用いうることは言うまでもないことである。しかし, 数の表示とは何か, どのような役割を果しているかという問題は一見したところより遙かに難しい問題であると思われる。

### 2. 2.1. 数

まずどのようなカテゴリーを通じて現実を捉えるかが決らない限り、ある現実  
に数を附与することはできない。同じ現実を *une famille* というふうに単数  
として捉えることも、*plusieurs personnes* のように複数として捉えることもで  
きる。同様に、*un continent* が *cinq pays* でも *mille départements* でもあり  
うる。このような意味で、数とは、*arbre, famille, personne* などのカテゴ  
リーと根本的に性質を異にすると考えられる。

その上、数は多くのカテゴリーに、ほぼ汎通的に附与することができる。  
*trois montagnes, trois accidents, trois idées* と *cinq montagnes, cinq*  
*accidents* 等々とも言うことができる。このような数の準汎通性とも呼ぶべき  
性質は、カテゴリー間に認められる従属関係とは異質なものである。カテゴ  
リー間の従属関係とは先ほどの例でいうと、*personne* というカテゴリーと  
*famille* というカテゴリーの間に認められるような関係である。*famille* という  
カテゴリーを通して捉えられる特定の現実とは、通常 *personne* というカテゴ  
リーを通して捉えられる現実を成員としているからである。以上、数とは、①一  
般に *arbre, famille, personne* などのカテゴリーと依存関係を持ちながら現  
実に関係している、②これらに対して準汎通的に附与できる、という点で後者  
のカテゴリーとは異ったレベルに属するものであると言える。

ところがさらに、数は単純に現実の性質に還元できないとしても、また我々  
が現実を捉える際の一つの態度を示していると看做することもできないように思  
える。ある特定の現実をいったん *forêt* ではなく *arbre* として見るなら、そ  
の現実がいくつ数を含んでいるかは、基本的には観察者の態度に依存しないか  
らである。

ここで、これ以上数に関する一般的考察を進めることはできないが、*je* や  
*tu* の単数表示のあり方について、もう少し考察してみよう。



## 2. 2. 2. je, tu の使用における半解釈的過程の不在と単数表示

多少分析を先取りすることになるが、je や tu の使用においては、arbre などの記号によって指示を行う場合とは異り、指示される現実が何であるかという、いわゆる解釈的過程が含まれていないと考えられる。arbre という記号によって指示ができるには、まず特定の現実が arbre である—arbre と呼ばれる多くのものと同じカテゴリーに入る—と判断できなければならない。多くの場合、あるいは少なくともディスクールの中かで最初にこの現実が語られるときは、知覚的な所与を基礎にこの過程が行われると考えられる。したがって、arbre などの記号が指示に用いられる場合、指示される現実に対して知覚的、つまり、なかば受動的で、なかば解釈的な過程が存在する。

ところが、je や tu の使用に関しては、話し手が自分を je であると知覚するから、あるいは je であると解釈するから自分を je と呼べるのではない。同様に、話し手が聴き手を tu であると知覚し、解釈するから、相手を tu と呼べるわけではない。je という記号を使用することによって、自分は je と呼ばれうる資格を得、tu という記号を使用することによって、相手は tu と呼ばれうる資格を得るのである。ここには、知覚したり、解釈する受動的な過程は一切なく、すべてが能動的である。ただ je, tu という記号を使用するという唯一の行為によって、指示が行われると同時に、成立するのである。

このことは、je と tu の使用において、なぜ数の附与が、記号のある現実に適用的という操作と別々の操作ではないかということの理解の手掛りになるように思える。すでに見たように、arbre や famille などの記号の場合、現実に対する記号の適用と数の附与とは別々の操作を成している。ある特定の現実には数を附与するためには、まずどのような角度からその現実を捉えるかが決まらなければならない。une famille ではなく cinq personnes と言うには、意識的にせよ、無意識にせよ famille ではなく personne というカテゴリーを通じて



現実を捉えるということを決めなければならない。この際、このような半知覚的、半解釈的な過程は、数を特定の現実に関連するための条件となっている。ところが、je や tu の使用においては、そもそもこの半知覚的、半解釈的過程が存在しないわけであるから、これに基づいて数を附与することなどありえない。特定の現実には、je や tu という記号を適用することと、数を附与することとは別々の操作ではありえないのである。

### 2. 2.3. nous, vous は je, tu の複数ではない

さらに、こうして考えると、nous や vous は、少なくとも familles が famille の複数であり arbres が arbre の複数であるのと同じような意味で、je や tu の複数であるとは言えないことが解る。「複数」の意味が常に同じであるには、nous と呼ばれる現実は、まず je というカテゴリーとして捉えられていなければならない。だが、nous が使用されるとき、このようなことが起っているとは思えない。ふつう nous は、話し手を含む複数の「人」であり、これらの人が一人一人すべて話し手であるわけではない。arbres の場合は、言うまでもなく、一本の arbre を含む複数の物ではなく、どの個物をとってもすべて arbre である。vous と tu の関係に関しても、基本的に、nous と je の場合と同じことが言える。要するに、nous や vous の使用においても、je, tu の場合と同じく、数の附与は、記号の適用と別々の操作を成していないのである。

### 2. 3. デイクシスの性格

je, tu の第三の特徴は、これらの記号の価値が、現在これらの記号が使用されているという事実を介してしか定義できない点にある。je の価値は、「je という記号を含む現時点のディスクールをおこなう個人の指示」、tu の価値は「tu

という記号を含む現時点のディスクールが向けられている個人の指示」と定義できる。ところが、これらの記号の指示対象が決まるための条件となっている「現時点でディスクールが行われている」ということは、すでに歴史的な時間性に関与する事柄であり、言表を歴史的時間のなかに位置を占めている一点、結接点と結び付けなければ、具体的な問題にならない事柄である。しかし、様々な特定の現実に対して繰り返し使用することができるラングの要素としての記号が、このような歴史的な時間性を示すことはありえず<sup>13)</sup>、この基準点は、記号が使用されたその時点でしかありえない。このように記号がいったん自らの使用を介して指示をおこなう性質をバンヴニストは「内的指示」*référence interne*、「自己指示」*auto-référence* と呼び、これがデイクシスと呼ばれる機能をもつ語 (*ici, maintenant* など) の定義特徴であることを指摘している。

記号自身の使用を介して指示をおこなうこれらの語 (デイクティック) の価値は、したがって、実際の使用の場においてしか実現しない。しかし、いったん使用されるとデイクティックは、たんに指示機能を果すだけではなく、使用の場を介して指示機能を果すことを、記号の価値によって積極的に示す。関係的な意味をもつ語 (*droite, gauche, mère, père* など) が、関係の基準になる表現を伴わずに用いられた場合、話者の左右を示したり、話者の母親、父親などを表すことがあるが<sup>14)</sup>、このような関係語は、関係の基準が明示されさえすれば記号の使用の場とは無関係に用いられうる。したがって、使用の場を介して指示を行うことを積極的に明示するデイクティックとは根本的に性質を異にしている。

「記号自身の使用を介する指示」というデイクティックの特徴は、指示対象の具えている性質ではない。指示対象の性質であれば、言語行為の行われる時々に変化する歴史的時間の固有性とはかかわりなく、比較的安定しているはずだからである。たとえば、一人の男が *Je suis fatigué.* と言うと *je* はこの男を指

示するが、これはこの男が je を使用したからで、「男」であるから、あるいは「人間」であるからではない。ちょうどお伽噺話のなかで猫が *Je suis fatigué*. というとき、je がこの猫を指示するのは、これが「猫」であるからではないように。すなわち、デイクティックの特徴である「記号の使用を介する指示」とは、対象の性質に対応する意味的価値ではない。これに対して、すでに見たように *arbre* などの名詞は、対象的现实の恒常的で顕在的な性質に直接対応する意味的価値をもっている。だから、何かを *arbre* と呼ぶには、そのものが実際に *arbre* でなければならない。この点においても je や tu は、対象的现实の性質に対応する意味的価値をもった *arbre* などの記号とは区別されなければならない。

#### 2. 4. 人称性

je, tu の指示的価値の特徴は、デイクティックのなかでも特に現在の言語行為の二つの主体「話し手」と「聴き手」を指示するという点にある。一人称、二人称の人称性とは、このように現在の言語行為における役割であり、現実の恒常的性質に対応するカテゴリーではない。そこで、この人称性、すなわち言語行為を通じて「話し手」、「聴き手」を指示することの特殊性に注目してみよう。

我々は人を見てその人がどのような言語行為を行うかを知ることができない。なおさら誰かを見て、どのような言語行為がその人に向けて成されるかはわからない。話し手と特定の言語行為、聴き手と特定の言語行為の関係は、その行為が行われてはじめて明らかになることである。これは *arbre* というカテゴリーとこのカテゴリーに入る個物との関係とは異質のものである。後者の場合なら、特定の個物を見て、それが *arbre* というカテゴリーに入るかどうかを恒常的に判断することができる。*cet arbre* のように *arbre* というカテ

リーを通じて指示物が同定される過程においては、指示物は実際に *arbre* であるのに対し、*je*, *tu* のように言語行為を介して指示物を同定する場合は、どんな時点においても、指示物は言語行為そのものではない。したがって、特定の言語行為とその主体の関係は、一つ一つ言語行為が成された場合において確認される必要がある。

また、人とその人が行う行為の関係は一般化することができない。誰かがある時にある種の言語行為を行ったとしても、同じような言語行為をふたたびその人が行うかどうかはやはり別の言語行為が成されてみないとわからない。だから、言語行為を介して話者、聴者を指定する方法は、一つの行為に関してしか有効性をもたない指示物の決定法であるといえる。

以上、*je*, *tu* を記号の価値という観点から分析した結果、その特徴を次の四つの点にまとめることができる。

1. *je*, *tu* の価値は指示機能によって定義される。
2. *je*, *tu* は単数表示を含んでいる。*je*, *tu* の使用には、現実をカテゴリーを通して捉えるという半知覚的、半解釈的過程がなく、このことと *je*, *tu* の使用が数の附与を伴うこととは相関的である。
3. *je*, *tu* の価値は、記号自身の使用を介して指示物を指定するデイクシスの性格をもっている。このような記号の価値は、指示物の恒常的性質に対応する意味的価値ではない。
4. *je*, *tu* は、指示物の言語行為を通じて指示物を決定するが、言語行為とその主体、「話し手」、「聴き手」の関係は、各言語行為に固有の関係であり、それぞれの言語行為が行われた場でしか認知することができない。

この四つの点において、*je*, *tu* という記号は、*arbre* などの記号と区別され

と考えられるが、このような特殊性をもった記号は、使用の場において、どのように機能するのであろうか。そこで今度は、記号の価値の問題から記号の機能の問題へと焦点を移し、je, tu のディスクールの場における機能の特徴を調べてみることにしよう。

### 3. je, tu の機能の特徴

#### 3. 1. je, tu の指示は普通常に成立する。

je や tu は、現実の恒常的性質に対応する意味的価値を具えていない。je や tu の指示物はその言語行為を通じて指定されるが、行為と行為の主体との関係は、各行為ごとに固有で一般化することのできない関係である。しかしそれではどうして、このように現実と恒常的な関係を持たない記号が、使用されるたびに決った一つの現実、一人の人を指示することができるのであろうか。この問いに答えるには、記号が認知される場、すなわち、「je が何を指示するか」という問いの生じる場が必ずディスクールの場であるという明白な事実を目を向ける必要がある。パンヴェストが je の「実例」instance と呼んだ実際に使用され認知された je は、je の指示物が定まるための条件となっている言語行為の証しでもある。殊に、この言語行為は、ある話し手の行為として、ある聴き手によって認知されるのであるから、je や tu の指示物は、あらゆる状況のなかで、すでに特定化された現実として認知されている。

ふたたび arbre という名詞を用いて指示を行う場合と対比してみよう。この場合、arbre という記号の認知が、即記号の指示物の認知を意味しないことは明らかである。だからこの種の指示は、記号が認知された上で、別に指示物が確認されていないと成立しない。また arbre という記号は、様々な個物に共通した一般的カテゴリーを表すだけなので、定冠詞や限定辞を付けて指示機能を果すことを示しても、同じカテゴリーに入る多くの個物から、今指示され



ている特定の個物を区別するのには充分ではない。したがって、状況や文脈によって特定化が充分成されないときには「どの木のことですか」と聴き手が特定化を要求しなければならないようなことも起りうる。

je や tu に関するかぎり、このように指示物の認知ができないような状況は生じえない<sup>15)</sup>。通常の対話の状況では、je, tu の指示物は、すでに特定化された現実として認知されているからである。また je や tu のもつ「単数表示」は、ディスクールの場で確認された話し手、聴き手以外の何物をも含まないことを示す働きをする。

聴き手は、je という記号で指示されうる多くの現実、つまり話し手になりうる人の中から現在指示されている個人を探す必要はない。話し手になりうる人はたくさんいても、今特定の言語行為によって、je という記号の要求する条件を満たしたのは特定の話し手一人だからである。

結局、je や tu は、特定の人によって、特定の人に向けて使用されさえすれば、他の人から区別された特定の人をまちがいなく指示する。特定の現実を他の個物から分離して指示する方法は、je や tu のような方法以外にも考えられる。そして事実存在する。特定の現実一つ一つに別々の記号を当てるという方法で、固有名詞は実際このような原則に従って機能している。ただ、この方法であると、各言語行為の特殊性にかかわらず常に同一の指示ができるかわり、個物の数だけの記号が必要であり、非常に不経済な方法ではある。

### 3. 2. je, tu は指示物の恒常的で顕在的な性質を明示しない。

je や tu は意味的価値を持っていないので、je や tu によって指示がおこなわれても、指示物が他の個物と共有する恒常的な性質は明らかにならない。もちろん、話者が言語行為をする能力を持っているという点は別であるが、能力とは、少なくともつねに顕在的なものではない。したがって je や tu が用いられ

るとき、記号が指示物に相応しいかどうかが問題になることはない。これらの記号の場合、使用しさえすれば、そのことによって、使用した人、またはこの記号を向けられた人が、記号の指示物としての資格を帯びるのであるから。je や tu は、人が今現在話し手であるとか、聴き手であるというそれだけの資格で、特定の人をまちがいに指示し、指示物の恒常的で顕在的な性質については何も明示しない。言い換えれば、この記号は、誰でも言語能力をもっていさえすれば、確実に自分自身ないし相手を指すために利用でき、使用しても、現在言語行為に参加しているという自明の事実をのぞいて何ものも明らかにしないのである。

ここで、je と tu の機能の特性を要約すると次のようになる。

1. je, tu は、現実の恒常的な性質に関係していないが、記号が認知されるディスクール場において je, tu の指示物は、つねに特定で単一の実在として認知されているため、je, tu の指示は、かならず成立する。
2. je, tu には意味的価値がないので、これを使用しても、指示物の恒常的かつ顕在的な性質は何も明らかにならない。

#### 4. 話し手から見た je と tu の使用

これまでのところ、je と tu を、記号の価値、記号の機能というふうに「記号」に焦点を当てて考察してきた。言語行為にとっては、「手段」を中心に分析してきたことになる。そこで最後に、話し手の観点に立ち、上記のような機能を果す記号を使用することは、話者にとってどのような行為であるかという問題を考えてみよう。

さきにも繰り返し強調したように、arbre という記号は意味的価値を持っているため、この記号によって指示を行う場合には、指示物と記号の価値を照合



するという現実に対して受動的な過程が含まれる。そのかわり、この種の指示がおこなわれたときには、聴き手は指示物が、たんに *arbre* というカテゴリーを通して捉えられていることだけではなく、*arbre* というカテゴリーに入る他の物と共通の性質をこの指示物が具えていることを理解する。つまり、話し手は、*arbre* という記号を用いて現実を指定するとき、同時に指示物の性質を明示、すなわち記述している。*je* や *tu* は意味的価値を持たないため、話し手は、指示物と記号を照合するという現実に対する受動的な過程を経ない。話し手は、*je* を使用することによって、*je* に指示される。*tu* の場合は、話し手が、*tu* を用いて話しかけることにより、話しかけられた人は、*tu* によって指示される。特殊な状況ではあるが、ペットやマスコットなど人間以外のものを聴き手と看做して話しかけることはよくある。当然、動物や物は実際には言語能力を持ってはいないから、正確な意味での言語による対話は成立しない。しかしそれにもかかわらず、*tu* を用いて話しかけられた動物や物は、その言語行為の受け手と看做され、*tu* によって実際に指示される。

ここで大切なのは、話者が、指示物のあり方に関係なく *je* や *tu* を用いることができるということである。ここまで来ると、「話し手である」とか「聴き手である」ということが、話し手にとって現実の恒常的な性質といかに異った意味をもっているかが明確になってくる。「話し手である」ことは、話者にとって解釈すべき所与ではなく、自分の行為のなかで自分が果す役割であり、「聴き手である」ことは、話し手が自分の行為のなかで相手に与える役割である。*je* と言うとき話し手は、そう言うことによって自分が果している役割を通じて、自分を指定する。同じく、*tu* と言うとき話し手は、その言語行為のなかで相手に与えている役割を通じて、相手を指定する。言い換えれば、話し手は、*je* を用いて、話し手になることによって自分を指定し、*tu* を用いて、相手を聴き手にすることによって相手を指定するのである。

## 5. む す び

以上, je, tu の使用を, パンヴェニストの指摘にもとづいて, 記号の価値, 記号の機能, 話者の行為という三つの観点から分析して来た。このような現象は, 言語活動の行為としての固有性を明確に示していると言えるであろう。

## 注

- (1) 言語を使用する行為 (énonciation)。オースチンなどが言う「言うことによってする行為」speech-act (「質問する」, 「約束する」等々) とは区別する必要がある。
- (2) Benveniste, E. “La nature des pronoms”, *Problèmes de linguistique générale* I, Gallimard, 1966, pp. 251-257. *For Roman Jakobson*, Mouton & Co. 1956.
- (3) je や tu のように機能によって定義される語を「記号」と呼ぶべきかどうかは確かに問題である。なぜなら, 「記号」は, フランス語の signe に対応し, signe は, signifier, signifiant, signifié などに関連しているため, 意味的価値をもつことを含意するような連想を誘うからである。しかし, ここであえて「記号」と呼んだのは, 次のような理由による。
  - ① 日本語の「記号」には, かならずしも意味的価値をもつという連想はない。
  - ② 意味的価値と機能によって定義される価値とは常に別々の形式に対応するわけではなく, むしろ通常一つの語がこの両方の価値をもつと考えられるので, je や tu を形式的なレベルで意味的価値をもつ記号と区別することは, かえって不都合のように思われる。
- (4) ここで「ある程度」とか「相対的」と言ったのは, 名詞のように意味的価値の同一性を原則として機能する記号においても, 実際には, 一つの記号が色々なディスクールのなかで持つ意味 (状況の意味) は多様であり, 一つの記号のもつ多様な状況の意味の間に, 共通する唯一の意味があるとは限らないからである。記号の潜在の意味は, むしろ, 柔軟性のある許容範囲のような形で存在すると考えられる。したがって, 記号の潜在的意味可能性 potentialité sémantique (ソシュールのシニフィエに相当するレベル) を, 記号の状況の意味と単純に同一視することはできないが, 状況の意味の方は, ディスクールの文脈や状況によって限定されているとしても, 本来記号の意味可能性に由来すると考えられる。
- (5) “Chaque *je* a sa référence propre, et correspond chaque fois à être unique, posé comme tel.”, Benveniste, *Ibid.* p. 252.
- (6) “un nom référant à une notion lexicale”, Benveniste, *Idid.* p. 251.

- (7) “Chaque instance d’emploi d’un nom se réfère à une notion constante et ‘objective’,” Benveniste, *Ibid.* p. 252.
- (8) “En dehors de cette condition d’emploi, qui est déjà distinctive, on relèvera une propriété fondamentale, et d’ailleurs manifeste, de *je* et *tu* dans l’organisation référentielle des signes linguistiques,” Benveniste, *Ibid.* p. 252.
- (9) Gide, A. *La porte étroite*, 1909, p. 533.
- (10) Renan, J.-E. *Souvenirs d’enfance et de jeunesse*, 1883, p. 341.
- (11) *Trésor de la langue française*, vol. 3, Klincksieck, 1974, p. 398.
- (12) *je* が現在のディスクールの話し手を指示しない例を挙げよう。

—“J’envoie un paquet ‘urgent’ en France.” (郵政省パンフレット)。この場合、*je* を含む言表全体が、パンフレットの発行者たる郵政省の言葉ではなく、利用者の行いうるディスクールとして語られていることが、言表の意味内容と状況との関係で理解される。

—“Comme Ego méditant, je peux bien distinguer de moi le monde et les choses, puisque assurément je n’existe pas à la manière des choses.” (Merleau-Ponty, M., *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p. VII)

ここでは、著者のみに関する叙述ではなく、*je* としてとらえられる現象一般について語っていることが、文脈、状況から判断できる。

- (13) 特定の現実に一対一対応することを原則とする固有名詞、年代などをのぞく。
- (14) この現象は、Fillmore によって指摘され、“default-deictic uses” と呼ばれている。

ch. J. Fillmore, “Towards a descriptive framework for spatial deixis”, *Speech, Place and Action*, ed. by R.J. Jarvella and W. Klein, Jhon Wiley & Son Ltd., 1982, p. 39.

- (15) 話し手と聴き手が直接対話するというもっとも一般的な状況に限定して考える。電話や差出人不明の手紙のように、話し手と聴き手の間に、中間的手段が介入した場合は別である。